
あるホラー作家の出会い（掌編）

田田田田田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるホラー作家の出会い（掌編）

【Nコード】

N6741I

【作者名】

田田田田田

【あらすじ】

売れない小説家であった私が、いかにして突如「書ける」ようになったのか。

全ては「彼」との出会いから始まった。そして、いま私は……。

【序】

あの頃、私の小説はまだ売れていなかった。その為、職業の前に「売れない」を冠することは、私の身に付いた習性となっていた。そして、酷い服装で深夜二時のコンビニをうろつく三十過ぎの女にとって、一種の鋼鉄製のカブトとして、自尊心をすっぽり護ってくれてもいた。前日に食べたカップ春雨が、袖に干乾びた寄生虫よろしくこびり付いていたこともある。それを友人に指摘されたときでさえ、私は大して動揺しなかった。

「売れない小説家でござーい」

この一言で、皆が勝手に納得してくれたのだ。

人気作家である父親から受け継いだものは、そのジャンルだけだった。つまり作品はどれもホラーなのだが、実際に担当者が身の毛がよだつ思いをしたのは、出版された後のことだったらしい。

私自身もピザの割引券付きのフリーペーパーのほうか、よっぽど面白いのではないかとさえ思っていた。忘れてはいけない。あちらさんにはカラー写真という武器がある。そして、想像してほしい。顔を悪性のにきびみたいなのピアスで満たしている、あの配達員の写真を。そう、あなたが間違って電話をしようものなら、二十分後に彼がドアの前に立っているのだ。腰に巻きつけた汚いポーチを、勃起したペニスで持ち上げて……。

というわけで、あの手の印刷物が 少々被害妄想で味付けをすれば ホラーの要素を十分に兼ね備えられることは、認めないわけにはいかない。

悔しいが、私の作品が勝っている点と言えば、紙質とページ数ぐらいたったのだ。

だが私は、「彼」と暮らすようになってから、突然「書ける」ようになった。手垢にまみれたキーボードは、息を吹き返したように、独りでにカタカタとタイプされ始めた。私は失われた十年を取り戻すかのように、ひたすらパソコンの画面に向かっている。その結果、わずか二ヶ月（！）で『狗鬼の哭く街』を脱稿することができた。この花壇のブロック並みに分厚い作品は、驚くほどよく売れている。彼がどれほどの魔術使いなのかは知らないが、今の私はいくらでも書けるのだ。

私はこの不思議を「愛の奇跡」と呼びたい。

これから、彼との出会いを、私なりに書き連ねていこうと思う。職業柄、どうしてもホラー調になってしまうのは、どうかお赦し願いたい。実際にそういった側面も、大いに内包されているのだから……。

【一】

私はどす黒い恐怖の波に怯えていた。背後から迫り来るものは、男の激しい息遣いだった。それは徐々に近づきつつある。カーブミラーに眼をやると、男の手に握られた金属片が月に光っていた……。

その日は、出版社の祝賀会に招かれた帰りだった。パーティーで得た物といえば、久しぶりに会った父からの小言と、この錬鉄製の文鎮だけである。長さは三十センチほどあり、＜創立五十周年記念＞の文字が彫られている。文鎮などに興味のない私に、その他の特徴をしいて挙げさせるならば……鉄アーレイのように重たい、というところだろうか。

売れない作家諸氏へ。入水自殺のお供にぜひ！ というわけである。

短めのスカートに胸元を強調したカットソー。私なりの「おめかし」である。電車のクーラーは、どうしたわけか酷く効き過ぎていた。下腹部には鉛色の雲が垂れ込めつつあった。月の物が近づいている……。私は駅から出ると、コンビニで翌朝用の食料を買った。野菜ジュースにシーチキン入りのおむすび、それと例のカップ春雨を二個。肩には文鎮の入ったバッグ、右手には買い物袋をぶら下げて、帰路についた。

辺りは薄闇に包まれている。台風の前触れのような艶かしい風が、草木を静かに揺らす。河土手の歩道は、青白い月光に照らされていた。アンバランスに磨り減ったパンプスの踵は、軟らかいアスファルトにめり込むようだった。

コツコツ、シャカシャカ、コツコツ、シャカシャカ……。

買い物袋の擦れ合う音と、獣の軟骨が鳴るような靴音が、展けた周囲に響く。河の流れは停滞し、そのコールタールのように黒光りする水面には、星々が浮かんでいる。河岸に沿って灌木の茂みが伸びていた。枝に絡みついたビニール片が、亡霊の掌のようにひらひらと揺らめいている。

はあ、はあ、はあ、はあ……。

音は何処からともなく忍び寄ってきた。生暖かい風に乗って、耳にまわり付くようでもあった。私の放つ物音と、背後を随けてくる男の呼吸音が、数メートル後ろで不気味に共鳴している。二人で魔物を招んでいるみたいだった。

私はすぐさま、郵便受けに投げ込まれていた「ファンレター」を思い出した。内容はこうだった。

＜親の七光りでクソみたいな小説を書きやがって。罰として、ケツ

の穴に俺のウンコをねじ込んでやる。せいぜい、「後ろ」には気を
つけな>

ただそれだけ。ブルーブラックのインクで殴り書きされた、恐ろ
しく下手糞な文字だった。それに良く見ると、「罰」という字が「
罫」になっている。また、便箋の端にはウスターソースのようなし
みが滲んでいる。

それでも私は、背中に冷たいものを感じずにはいられなかった。
切手も消印もない封筒は、差出人が切手代も払えないほど困窮して
いることだけでなく、彼が私のマンションの部屋番号まで知ってい
ることを示していたからだ。この事実は私を大いに震え上がらせた。
日常の世界は、ガラス製のスノーボールでしかない。そのことに
気付くのは、それを誰かが激しく振ったときか、机の上から落つこ
として粉々にしてしまったときだけだろう。男は今まさに、私のさ
やかな平和を、地面に叩きつけようとしている。

対岸を走るパトカーの赤色灯が、私をいつそう震え上がらせた。

はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……。

男の息遣いはさらに激しくなっている。

よりによってこんなときに……。私は下腹部に鉄球を詰め込まれ
たような鈍痛を覚え、女であることを呪った。辺りには、駆け込め
る人家も見当たらない。私は人気の途絶えたコンクリート橋を渡り、
手摺りに寄りかかりたい衝動を断ち切りながら、前へ前へと突き進
んだ。それでも男は後を追ってくる。

そして、カーブミラーに一瞬映ったその光る物を見たとき、憐れ
みにも似た恐怖が空から降ってきた。黒い男の影が握っているもの
は……恐らくナイフだ。

脚が思うように前へと動かない。いつそのこと、地面にへたり込
んでしまいたい。身体中の筋が、一本一本引き抜かれていくような
脱力感を覚えた。それでも私は、辛うじてバッグから文鎮を取り出
すことができた。まさかこの作家殺しの鉄アーレイで、身を護るこ

とになるうとは……。

再び歩き始めた土手の遊歩道では、にわかには草木がざわめきだし、生暖かい風が頬をなでた。心臓の鼓動は発動機みたいにけたたましく鳴っている。私はどくどくと波打つ血管が、千切れそうなほどの力で文鎮を握った。

その刹那、

「おい、またクソをするつもりか！」

突然、背後で男が怒鳴る。そして、何かが私のふくらはぎに触れた。

私は振り向くと、男のこめかみに向かって、文鎮を斜めに打ち込んだ。ひるむ男の側後頭部に向かって、さらにもう一度強烈な一撃を喰らわせる。

手ごたえ十分。すりこぎでキャベツを殴ったような鈍い感触が伝わってきた。やや遅れて、視界が男の黒い血潮に煙り、口中に釘を舐めたような味が転がった。私は完全に勝利したのだ。わずか数秒の出来事だった。

歩道に崩れ落ちた男は、二度激しく痙攣すると、動かなくなった。

想像していたのとは、まったく別の男だった。むしろ、誰もが口を揃えて「善良な市民」と呼びたくなるような、気の弱そうな老人だった。右手には小さな園芸用スコップが握られている。左手には……紐、いやリード？

ハア、ハア、ハア、ハア……。

一匹のシベリアンハスキーが、赤い舌を垂らして私を見据えていた。月光を湛えた青灰色の瞳は、なぜか私を嘲笑っていた。激しい息遣いが、私の足許に充満している。路面では老人の補聴器が、小さな肉の塊みたいに、鈍く光っている。

私は堪らなくなり、わなわなと地面に両膝をついた。小石が皮膚にジリジリとめり込み、生暖かい液体が膝頭を濡らした。

「彼」の食い入るような眼には、批難めいた色など微塵もなかった。だが、逃れがたい視線であった。彼は私を支配しようとしている。そんな、恐るべき意思が感じられた。

彼は赤い舌をぴちゃぴちゃと鳴らせ、私の股間から滴る小便臭い血液を舐めだした。彼の尻尾は、メトロノームのように、一定のリズムを刻んでいる。私の住む小さなスノーボールの世界も、同じリズムで揺さぶられているみたいだった。

ハア、ハア……。ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ……。

私は恐怖と一種の性的陶酔が緋い交ぜになった感覚に溺れていた。これが彼、つまり一匹の不思議なハスキー犬との最初の出会いだった。

【二】

あの老人の死は、昼間のニュースで知った。犯人はもちろん逮捕されていない。ここでこうやって、せつせと部屋の掃除に励んでいるのだ。別に証拠隠滅というわけでもない。少しでも「清廉潔白」な人間でありたいという、自責の念に対する浅ましい自衛本能の為せる業である。

ゴミを出すために、チェーンをはずしてドアを開けたときだった。全身に稲妻のような戦慄が走り、私はその場に釘付けになってしまった。

彼がいた。

彼は通路の日陰　つまり、隣室の小学生が並んでいる朝顔鉢のすぐ横　で、静かに横たわっていた。そして、昨夜と変わらぬ青灰色の瞳で、じっと私を見据えている。半分開いた口からは、鮮血のように赤い舌が覗いている……。

しばらく金縛り状態が続いた後、私はサンダルを引き剥がすようにして後退さった。背中からは脂汗がどっと噴き出し、シャツが皮

膚に貼りついた。

彼は次の日も、そしてその次の日も、そこにいた。さらに四日が過ぎ、五日が過ぎ、一週間が過ぎた。不思議なことに、マンシヨンの住人は彼の存在にまったく気付いていない。苦情もなければ、捕獲器具を手にした保健所員がやってくるわけでもない。

深まる恐怖に加え、飼い主を失った彼への憐れみが芽生え始めた。そもそも、彼からあの老人を奪ったのはこの私ではないか。

私は殻をむいて潰したゆで卵と、細かく刻んだ食パンを混ぜ合わせた。それを食パンのシールを集めてもらった無地の皿に載せて、ドアの前に置いた。全部平らげたのを確認すると、次は皿に水を満たしてやった。彼は水を少しだけ飲むと、嬉しそうに私の顔を舐めた。

結局、私は彼を部屋に招き入れた。私は彼を温めの風呂に入れ、犬用のシャンプーでダニを取ってあげた。ずっと外で飼われていたのだろう。バスタブの底に細かな土砂が堆積した。

それからというものの、元来ショートスリーパーであった私は、なぜか一日に十五時間近く眠っている。恐ろしい夢は、その間ずっと展開され続け、死から死へとバトンがリレーされていく。

昼過ぎに起きると、枕元に彼がいる。彼は眼醒めを確認すると、私の顔をくんくんと嗅ぐ。そして、目ヤニに覆われた眼球を、旨そうに舐めまわすのだ。それから彼は、満足したかのように眠り始める。ベッドの下に沈んでいくような彼の寝息を背にして、私はひたすらキーボードを叩き続ける。いくらでも書けるのだ。そう、いくらでも！ まぶたの裏から、言葉が洪水のように溢れてくる。ただその文字の奔流に身を任せるだけでいい。

死の街を後にして、一匹のシベリアンハスキーが、この街にやっ

てきた。彼の周りで次々と奇怪な死を遂げる飼い主たち……。

申し訳ない。詳しい内容については、拙著『狗鬼の哭く街』をご覧頂きたい。

とにかく、枕元からぞろぞろと這い上がってきた恐怖は、それが文字となつて現れるまで、私の頭から決して離れない。こうやってタイプし続けることが、唯一の逃げ道なのだ。

だが、今日……。

ある売れないホラー作家が、彼と出会う夢を見てしまった……。その小説家は、彼の主人を文鎮で殴り殺して……。

私は半ば放心状態で一気に書き上げた。それは異常なスピードだった。物語の展開に、タイプが追いつけないほどだった。しかし読み返す段階になって、はっと我に返った。彼がまだ眠っていることを確認すると、私は慌てて結末を書き換えた。

その為か、夢の恐怖は一向に消え去らない。あの女の悲鳴は、こびり付いた錆のように、いつまでも頭の中に残り続けている。

いや、それどころか女の絶叫はどんどん大きくなって、そして今まさに、私が張り上げようとする金切り声と……。

【了】

(後書き)

いかがでしたでしょうか。

皆様の率直なご感想以外にも、技術的な面での手厳しいご意見大歓迎です。

上手く書けるようになりたいので、ビシバシお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6741i/>

あるホラー作家の出会い（掌編）

2011年10月6日02時48分発行